

## 欠席の専門委員からの意見等

### ① 門平睦代専門委員

発生状況（資料 2）より 1999 年の飼料規制および 2003 年 11 月以降の強化も有効であったと推測できる。しかし、気になる点は、規制後に生まれた 2 頭（定型）である。32、42 ヶ月と月齢が低いので暴露量は多かったのではないか。ポーランド政府は、飼料規制強化を徹底させるために、2004 年と 2005 年にも様々な取り組みをしている。これは飼料規制が不十分であるための追加策と考えられるが、2007 年にはさらに忌避剤を加えるという処置をした。よって、2007 年時点で飼料強化が本当に功を奏したと言えるかもしれない。2007 年までには、この 2 頭が暴露された時期から 3 年間ほどの期間があり、その間に生まれた牛には陽性牛が見つかっていないということから、これらの 2 頭と類似したケースは存在しなかったと推測できる。この推測が正しければ、2011 年 7 月時点で「健康と畜牛」には 72 ヶ月未満の陽性牛が存在する確率は非常に低い。2011 年 7 月には「健康と畜牛」は 72 ヶ月以上が対象となり検査体制がゆるめられたが、このことによる悪い影響、たとえば、72 ヶ月未満の「健康と畜牛」で BSE に感染した牛の見逃しはなかったと願いたい。しかしながら、SRM の除去、家畜への使用禁止、レンダリング処理など EU の条例どおりにさまざまな処理が施行されているということであるので、審議の対象となった月齢制限と SRM の範囲を変更しても、人への健康影響は無視できると考える。

### ② 横山 隆専門委員

最終の BSE は 2005 年生まれであることから、2003 年に導入された飼料規制の実効性が認められるまでには数年を要したと考えられる。しかし、その後の発生状況、飼料規制の現状から、30 カ月齢の月齢制限ならびにわが国と同様の SRM の範囲をポーランドに係る輸入条件に適用しても、人への健康影響は無視できるとの判断は妥当と考えます。

なお、今回の評価に直接影響するとは思わないが、非定型 BSE の発生頭数が多い点が興味深い。これからの国内外の非定型 BSE のリスク評価のためにも、今後ポーランドにおける牛の出荷・淘汰年齢と BSE 陽性例のデータを入手しておくことが望ましい。